
神様のおもちゃ（緋弾のARIA）

黒猫大和の宅○便

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様のおもちや（緋弾のエリア）

【Nコード】

N4395T

【作者名】

黒猫大和の宅○便

【あらすじ】

神様の暇つぶしで殺されて
いろんな世界へいこう

そんな転生物です

プロローグ（前書き）

転生ものです。

会話ばかりですが読んで下さるとありがたいです。

プロローグ

ここはどこなのだろう？

辺りを見回しても何もなく、ただ真っ白な空間が続くだけ。

なぜこんなところに？

「やっと気が付いたか」

なんかイケメンが話しかけてくる。

「イケメン？ 当たり前だ！」

あれ？ 考えが分かってるのか？

「ああ、私は神だからな」

「神様なんですね。なら、ここはどこなんですか？」

「ここは死後の世界というのが解りやすいな」

「死後の世界？ 何で僕は死んだんですか？」

「ハッ！ 俺が殺したんだよ。わりいいか？」

「えっ！？ 何でを僕を殺したんですか！？」

「ん？ そりゃあ俺が暇だから遊ぼうと思ってたところに、偶々お前がいたから」

「えっと、どうやって遊ぶ気ですか？」

「お前、殺されたことを騒がないのか？」

「いや、だって死んじゃったなら仕方が無いでしょう」

「ハハッ、そうかそうか。まあいい。・・・お前を今から行きたい世界へ飛ばしてやる、アニメや漫画なんかの世界でもいいぞ！
好きな能力もつけてやる」

「いいんですか！？そんなんで」

「ああ、なんか面白そうだからな。さてどんな世界でどのような能力が欲しい？」

「えっと、じゃあ緋弾のアリアの世界で、脳味噌を100%活用できるようにして体もそれに耐えられるようにしてくださいそれだけいいです」

「そうか、じゃあ飛ばすからな。俺を楽しませてくれよ。」

そうして僕は緋弾のアリアの世界へ飛んだ

プロローグ（後書き）

これからガンバっていきます

生まれ変わりと物語の始まり（前書き）

やっと書き終わりました。

早く原作に入らなければ

では、どうぞ。

生まれ変わりと物語の始まり

「おぎゃー！おぎゃー！」

皆さん。僕、生まれ変わりました。

僕、石川 麗果です。

お父さんは石川 麗夜。怖いけどイケメンのようです。お母さんは石川 燈果。こちらも中々の美人さんです。早速自分の将来が楽しみです。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

—————時は流れ——、高校二年生——。パチパチ。

ぶっ飛びました！

赤ん坊の頃は二年ほどきつかったです。羞恥プレイ（笑）

幼稚園に入って、楽しく遊べると思っていた時期もありました・。
・。幼稚園へ入る歳になってからと言うものの毎日、毎日修行です。
山簞りで毎日木刀を振り、剣術を身につける。これが小学校へ入るまで続く。

小学校へ入ってからは武術を学びながら学校へ行く。この間も父へ剣術の稽古をつけられヘトヘトです。そのせいか友達も出来ず悲しい小学校生活を送りました。

そして中学生。入学したところは神奈川武偵高付属中学。原作キヤラのいるところだ。ここではキンジと知り合い楽しくは出来ていた。だが、やはりここでも父が出てくるわけで、今までのまとめと忍術（超能力）を教わった。ここまで来るとお分かりかもしれないが、自分は石川・・・そう、大泥棒 石川五右衛門<いしかわごえもん>の子孫なのだ。ちなみに俺の代で五代目である。

そして今は東京武偵高校の強襲科の二年でSランクで通ってる本当は超能力捜査研究科なんだけど転科した。

……ピン、ポーン……

慎ましいドアチャイムの音…白雪だ。早速ドアを開ける俺。

——ガチャ。

「白雪」

そう名前を呼ぶと、

「麗ちゃん！」

「どうした？」

一応用件を聞いておく…まあ、いつもどうりなんだろうけど。

「一緒に行こうと思って」

やっぱりなく。

「そうか。でも、ごめん。キンジに話しが有るし、先に行ってくれ」

「わかった。じゃあ行ってるね」

——ガチャン。

合う日だし。・・・そろそろ行くかな。

こうして俺はキンジの後をつけて行くのであった。

[illegible]

生まれ変わりと物語の始まり（後書き）

どうでしたか？

感想などお願いします。

麗果×セグウェイ（前書き）

お久です。

僕は友達が少ない。6巻ついに発売！そのうちこっちもやります。

では、どうぞ

麗果×セグウェイ

キンジ視点

「その チャリには 爆弾 が 仕掛けて ありやがります」

なんかアホみたいなこと言っているが……もしかしたらマジかもしれない。…武偵はいつ命を狙われるか解らない、恨みを買うことも少なくはないからだ。

「チャリを 降りやがったり 減速 させると 爆発 しやがります」

そんな台詞を聞き、台詞の一部を思い出す。

——爆弾……だ？

眉を寄せて周囲を見回すと、ギョツとしたことに俺の自転車にいつの間にか妙な物体が併走してきた。こいつは……昔テレビで見たことがあるぞ。

『セグウェイ』とかいう乗り物だ。

「助けを 求めては いけません。ケータイを 使用した場合も 爆発（ ㇿ ）ビンゴー しやがります」

変なのが聞こえたが、まあいい。セグウェイは……あれえ？ なんて麗果が？ しかも、その頭上にはスピーカーと…UZI。

「……何やってんだお前」

「何って、……登校？」

何なんだよ、こいつ。

「そういうことじゃなくて！なんでUZIがあるんだよ！？」

「これに載ってた。俺が乗るのに邪魔、だから浮かしてる。お分かり？」

そんなことをいいながらUZIの銃口を向けてくるな。

「おい。キンジ。サドルの裏にC4『プラスチック爆弾』がついてるけど、いいのか？」

俺は急いでサドルの裏を見る。……そこにあったのは自動車を跡形もなく消し飛ばせるサイズのC4だった。

——マジかよ——

全身に悪寒が走り、冷や汗が滲む。

ハメられた。なんてこった。チャリを乗っ取られた。

「世にも珍しい、チャリジャックでわないか」

ちくしょう。

ちくしょう。

何なんだコイツは。

なんで他人事みたいに。……俺は万一に備え、とにかく人けのない場所を探して走り、走り、第2グラウンドへと向かった。

金網越しに見た朝の第2グラウンドには、いつも通り誰もいない。俺は仕方なしに、その入り口めがけてチャリをこぐ。麗果は相変わらず、銃を向けながら併走してくる。セグウェイを俺に向けたやつの手口は、白雪が言ってた『武偵殺し』の模倣犯じゃねえか。

ていうか——コイツはどうかかなんないのかよ！その時だった。俺はこのありえない状況のなか、さらにありえないものをみた。

グラウンドの近くにある7階建てのマンション——たしか、女子寮——の屋上の縁に、女の子が立っていたのだ。

武偵高のセーラー服。

遠目にも分かる、長い、ピンクのツインテール。

彼女は——有明の白い月をまたぐようにして、飛び降りた。

「おー、飛び降りた」

また、他人事かよ。

飛び降りた女子はパラグライダーを広げ、此方に滑空してくる。そして少女は両足の太ももに着けたホルスターから、それぞれ銀と黒の大型拳銃を二丁抜いた。

そして――

「ほらそのバカ！さっさと頭を下げなさいよ！」

バリバリバリッ！

俺が頭を下げるのより早く、問答無用で麗果の乗っているセグウェイを銃撃した！

キンジ視点 終了



麗果視点

バリバリバリッ！

女子寮から飛び降りた少女がいきなり撃って来やがった。

――でも俺に向かってそんなことしても無駄だ。

――『弾の動きが全て視えるからだ』

俺は腰に着いていたホルスターから、黒に金の装飾を施してあるデザートイーグル二丁を出し、弾を全て撃ち落とす。

「なっ！？」

少女は自分の弾が撃ち落とされたことに驚きの声をあげながらも、少女はすぐにキンジの頭上に飛んだ。

「く、来るなって言っただろ！この自転車には爆薬が仕掛けられてる！減速すると爆発するんだ！お、お前も巻き込まれるぞ！」

俺の心配はしてくんないのかよ。

「――バカっ！」

キンジの真上の彼女は……げしっ！

キンジの頭を踏みつけた。

「武偵憲章1条にあるでしょ! 『仲間を信じ、仲間を助けよ』——いくわよ!」

そのまま彼女は飛び、キンジが彼女に向かい、走ることになった。そして、彼女はキンジを拾い上げる。

——だが爆風から逃げ切れない。

俺はとっさにチャリを覆うように爆発に耐えられるバリア? を創った。

——ドガアアアアンツツ!!!

チャリは吹き飛び、キンジたちは・・・無事だった。無
事と言ってもキンジ達は、体育倉庫に突っ込んでいった。

——そんなんじゃ、これから大変だな。

麗果×セグウェイ（後書き）

文がおかしいですね。また治しておきます。

アドバイス・指摘・感想よろしくです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4395/>

神様のおもちゃ（緋弾のアリア）

2011年6月27日23時13分発行